

あ と が き

「あと5年もすればチャウケーの鉄鋼業は消えてなくなるだろう」。2006年12月、筆者がチャウケーに足を運び始めた頃に訪問したベトナム鉄鋼協会的主席ファム・チ・クオン氏は、自信あり気にそう断言した。外資参入により工業部門の近代化が進むベトナムでは、遅れた技術と限られた資本しかもたない小規模なインフォーマルセクターは、まもなく大規模国有企業や外資企業に淘汰されていくだろう、というのが彼の見立てであった。

結果としては、クオン氏の予想は裏切られることになる。鉄鋼産業の一部の企業が近代的な装備をもち順調に競争力を高めていることは間違いないが、その一方で、(少なくとも本書執筆時点では)チャウケーの鉄鋼業も発展し続けている。本書ですでに述べたように、ドイモイ開始後のベトナムでは、経済規模が拡大しただけでなく財・サービスの需要が多様化し、チャウケーの家内企業も低価格・低品質の建設資材という市場のニッチを獲得し、規模拡大した。チャウケーのみならず、規模も生産される製品も異なる他の専業村も同じような発展を遂げてきた。

ここで話は若干変わるが、その頃ベトナム経済研究で最も流行していたトピックは、「貧困削減」であった。世銀のエコノミストや欧米の経済学者たちは、こぞって大規模家計調査V(H)LSSのデータに飛びつき、ベトナムが経済自由化後に短期間で貧困を解消した要因を探った。個々の研究の異なる目的やスコープにより、細かいニュアンスは変わるものの、大雑把に言えば、彼らの研究の結論は、貧困層に「機会が増えた」ということに尽きる。農村に滞留する労働力が、ドイモイ開始以降の経済活動の自由化で雇用やビジネスの機会を得て、所得が向上したという結論である。

その後、2000年代の末頃から、「中所得国の罫」の議論がベトナム経済研究の世界で流行し始める。低賃金の労働力を武器に軽工業品を輸出すること

で2000年以降急成長したベトナムは、アメリカという世界最大の消費市場にアクセスする機会を得てその分野に投資を集中させて成長したに過ぎず、その間生産性向上の努力を怠ってきたベトナムは、このままでは早晩「罨」に陥ると警告である。

ベトナムの貧困削減研究も「中所得国の罨」の議論をベースにした研究も、ベトナムの発展を「余剰のはけ口」的な発展ととらえる姿勢は共通している。そして專業村の発展も、同じような図式でとらえることは可能であろう。クオン氏は単に鉄鋼市場の裾野の広さを見誤っていただけといえるかもしれない。

しかし、專業村の家内企業の経営者や労働者、職人たちは、たまたまよい時代にめぐりあわせた幸運をただ何もせず享受してきたわけではない、というのが本書のメッセージである。日々変わりゆく市場の状況や政策の変化をとらえ、制度的な工夫を凝らし、貪欲に技術を吸収し、家族という単位の厚生を最大化させるために職業選択を行う彼らの行動を記録し、研究書としてまとめておく必要があると考えたことが、本書執筆の動機である。それは、貧困削減研究や中所得国の罨の議論がとらえるベトナムの発展の姿に対して感じてきた違和感の表明でもある。

筆者も VHLSS のデータやベトナム統計総局が実施するさまざまなサーベイのデータは頻繁に利用する。しかし、データからはみえてこないベトナムの経済主体の行動原理を、長期間にわたるフィールド調査から探ることも、一国の経済に対する理解を深めるうえで重要である。そのようなスタイルの研究が許される環境下にいる筆者は大変恵まれていると改めて感じる。

今思えば、2000年代半ばに專業村の調査を開始したことは幸運であった。当時は、それまで経験したことがない好景気にベトナム中が浮かれていた時期であったが、2008年9月からは、世界的な経済危機のあおりを受けて、ベトナム経済も急減速し、その後も長きにわたり停滞した。それでも專業村はしぶとく生き残り、そればかりかその厳しい時期に規模を拡大した家内企業さえある。その浮き沈みの過程を10年間にわたり観察できたことは、農村経

済だけでなく、ベトナム経済全体の理解を深めるうえで役に立った。

本書は、筆者が所属するアジア経済研究所で2007年から実施されてきたふたつの研究プロジェクトの成果である既発表論文（坂田 2009b; 2010; 2013b）を大幅に加筆・修正し、さらに、筆者のかかわってきた3つの文部科学省科学研究費プロジェクトの調査結果を元に新たな書き下ろしを加え、アジア経済研究所の2015年度の個人研究プロジェクトの成果としてまとめたものである（文部科学省科学研究費プロジェクトは「グローバル化、工業化・近代化期におけるベトナム農業・農村の総合的研究」[平成21～23年度基盤研究B, 研究代表者 辻一成], 「ベトナムの農村経済の変容とミクロ分析」[平成23～25年度基盤研究B, 研究代表者 秋葉まり子], 「高度工業化推進段階におけるベトナム農業構造再編と農業の担い手の展望」[平成25～27年度基盤研究C, 研究代表者 辻一成]）。

成果をまとめる過程で、有益なアドバイスや批判をくれたアジア経済研究所の多くの同僚たちに感謝の意を表したい。もともとの勉強不足に加え、50歳を過ぎた衰えからか、ともすれば独りよがりになりがちな筆者の議論に対し、常に警鐘を鳴らしてくれる貴重な存在である。とくに、研究双書出版のプロセスでは避けて通れない内部査読の段階で、数々の厳しくも的を射たコメントをくれた査読者には深く感謝したい。

また、ベトナム研究に長く携わる研究者の先生方からも、有益なご示唆をいただいた。とくに早稲田大学の白石昌也先生（「専門村」という訳語をご提案いただいた）からは、専門村の発展を農村社会の歴史的な変化の文脈でとらえることの重要性について、トラン・ヴァン・トゥ先生からは、労働の面から農村工業をベトナムの経済発展のなかに位置づける意味について、そして佐賀大学の辻一成先生からは、農村世帯の生計戦略としての労働分配や農地の維持について、さまざまな研究会や勉強会、そしてその後の宴席の場でのディスカッションの際に、重要なお教示をいただいた。改めて感謝申し上げます。

最後にベトナムでお世話になった方々についてもふれておきたい。ベトナム社会科学院のベトナム経済学研究所と持続的地域発展研究所、そしてハノ

イ国家大学ベトナム学・発展科学研究所の研究者の方々からは毎回調査の際にご協力をいただいた。いまだに制約の多い農村の調査で、彼らの存在は大変心強かった。とくに、ベトナム経済学研究所のヴァー・トゥアン・アイン氏には、チャウケーだけでなく、多くの専業村に連れて行ってもらった。最も感謝しなければならないのは、専業村の人民委員会の幹部や調査に応じてくれた家内企業の方々、そしてそこで働く人たちである。初めて訪問した際にチャウケー社の副主席（幹部の序列では第3位か4位ぐらいであろうか）であったタン氏は、2014年には序列トップの党書記にまで出世した。会うたびにタン氏の体格に貫禄が増して行く様子を見るのは、調査のひとつの楽しみでもあった。つぎにチャウケーに行くときには、本書の写真だけでもみてもらいたいと思っている。

2017年2月 著者